

# 建築家の考え

## 建築家：入江正之早稲田大学名誉教授

基本的には門構えの背後にある昔ながらの瓦屋根の木造住宅を、既存の状態を保ちながら、新しく加える部分や洋間的客室への改修、さらに既存に茶の湯ができるような機能の付加による修正をすることで、昔の萩の暮らしを味わいつつ、訪れる方々が自由に住まえる工夫を加味した滞在施設にしようと考えています。空き家を復元しなおすことは、隣り合う熊谷家との連なりや、周辺の家々との交わりを育み、今魚店町の道筋の雰囲気や次時代へとつないでいくことにつながります。人々が普通の家とともに生活をし続けることで、家並みが生き生きとし、道筋が快い空気感を醸成させることでしょう。歴史を画する建築遺構の重要性と同じように、歴史をつないで生き生きと暮らしを持続して来た家々、家並み、そして路地といった総合的なものこそ人間生活遺構というもので、歴史的建築遺構と相対しながら保つづけることがもっとも大切です。そのような考え方で、空き家の再生プロジェクトに取り組んでおります。

---

## オーナーの思い

父が定年を迎え、郷里に帰ることをきっかけに、萩へ両親に会いに行く行事がスタートしました。母がなくなり父が亡くなるまで、萩を訪ねる日々は20年以上続きました。この重ねてきた時間が私達の萩への思いを育むことになったと思います。歳月は建物も変化させ、気が付いた時には、実家も手を入れなければいけない限界の時期に来ていました。誰も住まなくなった空家をどうするか。壊す・売却する・貸すとあれこれ考える中、友人知人に自宅で数日間萩観光を楽しんでもらう機会がありました。それを期に、もっと多くの方々に萩を知ってもらい、ゆっくりと楽しんでいただきたいと思うようになりました。そうすることで家屋敷も喜ぶのではないだろうか、また、そうすることにより萩の観光に一役になれるのではないだろうかと思うようになりました。

仕事の生業からわたくしたちも7年前から「空き家対策」空家管理事業を行なっております。今のわたくしたちのように、遠方に空家をお持ちの方がいらっしゃると思い「自分たちがしてほしい支援を」という思いからでした。空き家事情は多くの市町村の課題となり、国を脅かす課題ともなりました。深刻化する事情を前に、空き家は「役立つもの」になればという考えを強く持つ持っております。そして萩こそ、観光資源として空き家が役立つのではと思うようになりました。見ごたえある歴史や景色は今も健在です。ささやかではありますが、空家であるわたくしたちの家が、萩の地域資源を存分に活かす「地域活性の場」として役立つことを夢見ております。